

歴史



山北棒踊りの由来

主人思いの家臣によって伝えられた棒術と山北で生まれた土佐藩主第八代山内豊敷公

土佐藩主第八代山内豊敷公の父親が山内主馬規重です。規重は、山内氏の一族の中でも人望があり、五代藩主山内豊房のもとで奉行、そして家老となり緊縮財政政策を採用するなど藩主を補佐した人物です。

しかし、正徳元年(一七一一年)、家老の婚儀に関連したことが原因で失脚し、香美郡山北村に蟄居を命ぜられました。この時、蟄居中の規重の心を慰めようとした家臣らが、村の若者を集めて教え演じさせたのが小栗流棒術でした。これが山北の棒踊りの始まりだと伝えられています。

また、正徳二年に規重の嫡男(一太郎(豊敷))が山北村で誕生し、享保十年(一七二五年)に八代藩主になったことで、

この棒術が山内家の庇護を受け、浅上王子宮の奉納武術として推奨されました。

山内家の家紋、三柏の紋章が「棒踊り」の正装の紋所として使用が許されたのは、こうした縁故によるものです。その後、荒木流棒術、浅山流棒術が伝えられ現在の型になったと言ひ伝えられています。

※蟄居：家に閉じこめ謹慎させること



▲大正末期から昭和初期の棒打ちメンバー



▲昭和60年の棒踊り(本棒)。担がれる大将(後の大将)と前衛の中心(前の大将)が紫のたすきで、その他は青のたすきを着ける。大将は花形で、青年たちの憧れです。

土佐藩の武芸

坂本龍馬が習得した小栗流

小栗流の名を今にとどめているのが、山北の棒踊りです。

小栗流の棒術は、三代藩主山内忠義の時代に朝比奈可長が、土佐藩の武芸として小栗流棒術を伝え、その後、門弟たちにより継承されました。幕末には龍馬も小栗流免許を得ています。

棒踊り

棒踊りは、本棒と小棒からなっています。

本棒

本棒は、白一色の袴着姿の青年十人ずつが一組となっ

小栗流の精神は「風和理気貫通」

「風和」とは、風に散る木の葉の如く行き先を定めずふわふわとしていること。「理気貫通」とは、相手と立ち合うや否や、相手の心に入り込み、突き倒す程の勢いを内に持つことを意味します。



小棒

小棒は、二人一組で演じられます。面切り、ひし、つき、花飛びの五つの型があり、どれも相手を倒す勢いの気迫のこもった技が見られます。

五つの中でも「面切り」は、本棒で担がれる大将が対峙します。

その他、余興として二人一組で逆立ち逆転していく「車返し」や、一升酒と枅を持った二人が、酔っぱらいを演じながら棒打ちをする「ようたんぼ」があります。



▲小棒「面切り」

地唄師(木遣り節)



棒踊りに欠かすことのできないのが地唄です。一人前の地唄師になるには、その素質もさることながら5年とも10年とも言われ大変奥の深い芸能です。

木遣り節の原型は、伊勢音頭に近い内容だったようですが、地元にもつわる事柄を取り入れるなど、少しずつ変化し、またリズムも棒踊りに合わせた調子になっています。現在、地唄師は5人で構成されています。

子供棒

子供棒は、棒踊りの基本となる小棒の「ひし」の型を演じます。

平成2年に地域興しの一つとして、地元の小学6年生男子による子供棒が始まっ



秋の大祭が平日の年には、地域や学校の理解と協力が有り祭りに参加します。また、クラスメートも地域学習の一環として見学に来ます。

